ISSN 1344-5715

Bulletin of Tokyo Kasei Gakuin University Library

東京家政学院大学 図書館報

平成21年3月5日 第55号

発行者 東京家政学院大学
附属図書館
〒194-0292 東京都町田市
相原町2600
電 話 042(782)9815
印刷所 (株)栄文舎印刷所

原典にさかのぼろう

伊東 蘆一

まごびき(孫引き)という言葉がある。新明解国語辞典では「他の本に引用してある文句を、無批判にそのまま引用すること〔誤りの元になる〕」となっている。私は、若いころ、「論文執筆に当たって、孫引きはするな、原典にさかのぼれ」ときつく教育されたが、最近、論文執筆以外の局面で、原典の重要性をあらためて感じさせられる体験をした。

食物が胃から腸に流れ込むと、胃液中の塩酸の刺激で、膵臓から消化液(膵液)が分泌される。ベイリスとスターリングという二人の生理学者は、「胃液の刺激によって、小腸の胃に連なる部分が『ある物質』をつくり、これが血流に乗って膵臓に達し、膵液の分泌を促す」との仮説を立て、このことを実験的に証明した。現在、この物質はセクレチンとよばれている。

高校生物Ⅰの教科書には、この実験を記載したものがある。私は、入試問題の材料にこれを使おうと思ったが、記載に不可解な点があることに気づいた。教科書では、「完全に神経を取り除いた小腸の胃に連なる部分(十二指腸)に塩酸を流し込んだ後、その内壁の一部を切り出し、塩酸を加えてすりつぶし、その絞り汁を膵臓に連なる血管に注入したところ、膵液が分泌された」との趣旨の記載が図入りでなされ、これによって前記の仮説が証明されたとしている。私にとって不可解だったのは、コントロール実験のことが記されていないことであった。「塩酸ですりつぶした腸の絞り汁を血管に注入すると膵液が分泌された」というが、その効果は腸壁に含まれている「ある物質」によるものか、それともすりつぶすのに使った塩酸の効果なのかがわからない。これを明らかにするためには、塩酸だけの効果をみる実験が必須である。

とりあえず、この実験のことが書いてある論文を探そうと思い、キーワードとして「セクレチン(Secretin)」と「スターリング(Starling)」を用い、PubMedで検索してみた。ヒットした文献のうちに2005年のJournal of Medical Biographyに掲載されたスターリングの評伝があり、要旨から、セクレチン発見のことが取り上げられていることがわかった。私は、いつものように図書館に他機関からのコピーの取り寄せを依頼した。図書館からは、直ちに、「このジャーナルを所蔵している図書館はわが国にはない。コピーを入手したければ、British Library(英国図書館)から取り寄せる」旨の連絡があった。私は取り寄せを依頼し、コピーが到着したのは、わずか4日後であった。残念ながら、この評伝にはコントロール実験のことは取り上げられていなかったが、これをもとに1902年のJournal of Physiology (London)に掲載されたベイリスとスターリングによる原典にたどり着くことができた。再び、図書館にこの100年以上前の原典のコピー取り寄せを依頼したところ、直ちに、「この文献はPubMed Centralというデータベースに収載されており、全文を無料でダウンロードできる」という連絡を受けた。これには実験の方法が詳細に述べられていた。驚いたことに、教科書に十二指腸とあるのは、原典では十二指腸の先の「空腸」で、絞り汁が注入されたのは、膵臓への血管ではなく「頚静脈」であった。コントロール実験として、血管に塩酸のみを注入しても膵液の分泌が起こらないこと、空腸の先の回腸の粘膜に塩酸を加えてすりつぶした絞り汁を血管に注入しても膵液の分泌は認められないことも記されていた。

この経験は、私に、原典にさかのぼることの重要性を再認識させた。教科書の著者は、いったい何を孫引きしたのだろうか。

本学の図書館は、いかなる原典であろうと、あなたが必要とすれば、それを世界中の書物の中から探し出す手段を準備して待ち構えており、そのためのサービスの努力を決して惜しまない。

(附属図書館長)

第五十五号 目次

原典にさかのぼろう 伊東 蘆一
講座「大江スミ先生を語る」開講からの歩み 藤居眞理子
大江文庫公開事業：展示学習 新しい知との出会いをめざして 井上 眞弓
本の周辺 『お母さんに伝えたい子供の病気ホームケアガイド』 茂木富美子
今も昔も ―節句― 大久保晴雄
寄贈著書紹介
文学教育の現場から
資料の紹介 『design of life 生活のデザイン』の考え方 岩井 一幸

講座「大江スミ先生を語る」開講からの歩み

藤居　眞理子

講座「大江スミ先生を語る」は、平成一七年度から開講している基礎科目です。履修学生四〇名ほどで出発し、四年目の二〇年度は二七六名にまで成長し、小規模授業が特徴である本学としては、例外的な存在になりました。

故・占部久子教授がカリキュラム委員長であったとき、女性史上の先駆者を取り上げ、基礎科目の「生き方の問題」として設置したいとの意向から、この科目が浮上したと伺いました。開講に当たり卒業生である私に科目の世話人になるよう声がかかりました。

そこで、本科目の概要を、「本学の創立者大江スミ先生が掲げた、高い理想と、これに立ち向かう強い意志、神を畏れ、人を信じ、謙虚で円満なお人柄、時代を見抜く先見性など、魅力あふれるひととなりについて、直接教えを受けられた先輩諸姉に講じていただき、大江先生の生涯から生き方を学ぶ」としました。

利谷学長

講師にお迎えしたい先輩は、尊敬する恩師でもある吉永フミ名誉教授でした。先生は多忙の中、永年にわたり、大江先生関係の文献・資料の収集、著書の復刻、ビデオ「大江スミ先生の生涯」の制作、ご昇天日の墓参、大江記念館設立活動等々にご尽力なさった方です。また、先生は一九八五年に大江先生の建学の精神を継承すべく大学に働きかけ、当時の小林行雄学長、荒木五六専務理事、内野越乃光塩会長、あづま会員など五四名の有志により、一九八六年に大学と卒業生が一体となった「大江スミ先生を語り継ぐ会」の発足を実現されました。さらにご在職中は、学内で「著書を読む会」を主催なさり、学内外の後輩に対し、根気よくご指導くださいました。開講予定であった一六年度後期、脚力の衰えが原因で、吉永先生を講師としてお迎えすることができず、開講は延期されることになりました。

城戸崎客員教授

講師としてお迎えできる方を考える中、「語り継ぐ会」において、吉永先生の手足となって活動している方々の存在を知りました。その中に澤田佳代子氏がいらっしゃいました。この科目を開講に導いた重要な人物です。本学管理栄養士専攻ご出身で、本学短期大学助手のご経験があり、光塩会理事として同窓会誌「光塩」の編集等に尽力され、溌剌とした草月流華道家でもいらっしゃいます。氏はこの科目の重要性を認識していらっしゃって、無理やりのお願いを引き受けてくださいました。山口智子助手の協力も得て、一七年度に漸く開講の運びとなりました。

本科目は四本の柱で構成されています。一本目の柱を澤田佳代子氏にお願いし、全一五回の授業の内六回をご担当いただいています。各回の副題は、ビデオ「大江先生の生涯」、「信仰」、「学院経営者として」、「戦争・復興・そして」、「大江先生亡き後の学院の歩み」、「同窓会と社会に巣立った卒業生」です。

二本目の柱は利谷信義学長です。開講当初からご参加いただきました。「家政学院創立の頃」、あるいは「大江スミ先生と私」という題目で、大江先生の教育を支えられた穂積重遠先生（民法）と戸田貞三先生（社会学）について、時代背景について、穂積先生の孫弟子にあたる利谷先生と家族法との出会い、男女共同参画社会への歩み、大江先生から学ぶ、という内容の講義です。その講義は丁寧で分かりやすく、学生が提出するレポートは全て目を通され、レポートに記してある質問に必ず答えてくださいました。利谷学長は、本学の学生であることに自信と誇りが持てるよう、本科目を自校教育と位置づけ、ご自身から希望なさって二回の講義をご担当くださいました。その熱意は、体調を崩され入院なさったときも衰えることなく、日程を変更し、お付き添いに夫人を伴われてまでも、教壇に立ってくださいました。先生の存在は誠に大きいものでした。

三番目の柱は、本学が誇る大江文庫の紹介です。附属図書館の関原暁子事務部長にご担当いただきました。初代図書館長が、大江先生の業績を記念し、名を残したいとの想いから大江文庫が誕生したこと、文庫の概要、資料の活用事例など、館員の協力のもとスライドショーでの講義が行われました。二回目は図書館での授業で、本物に触れることこそが大江精神であるとのお考えから、学生数が急増した一九年度以降も、貴重な資料を直に手に取り、触れるというご指導を堅持してくださいました。

四本目の柱は、ゲストスピーカーの方々です。一七年度は女性史

地頭所裕美氏

の立場から、佐藤広美教授にご参加いただき、「福沢諭吉の『女大学』批判」、「平塚らいてうにおける女性の思想を紹介」と題し、二回をご担当いただきました。

一八年度は家政学原論の立場から、上村協子教授にご参加いただき、「家政学の成立と大江スミ先生(一)」、「同（二）現代日本の家政学のルーツを探し」と題し、二回をご担当いただきました。

一九年度は城戸崎愛客員教授にお願いし、大江スミ先生を語る(七)として、大江先生が戦禍の中、人に頼んで教え子を中国まで無事に送り届けたエピソードをお話いただき、大江先生の責任感と実行力、英知と真心をご紹介くださいました。また、学徒出陣を見送られた城戸崎先生のご経験から、平和を守り抜く決意やご自身の歩みなど、心に染み入るご講演を頂戴いたしました。

二〇年度も城戸崎先生にお願いして、明るく前向きで温かいお人柄そのもののご講演を拝聴することが出来ました。

また、新たに社会で活躍する卒業生として地頭所裕美氏にご講演をいただきました。氏は本学短大卒業後、松下電器産業に入社、電話交換手からスタートし、三六歳で松下グループのマーケティング会社で、女性初の取締役に抜擢された経歴の持ち主です。現在は一児の母でもいらっしゃいます。学生にとって、ゲストスピーカーの影響もまた、誠に大きなものでした。

世界の価値観が大きく変わろうとする現在、人権が守られ、情が尊重される社会を構築することが強く求められています。人間性豊かな人材を育成する家政学院の教育は、今後益々重要性を増すものと思われます。本科目がその一端を担えるよう、内容の更なる充実を目指し、一七年度から二〇年度を一つの区切りとしてご紹介し、ご尽力いただいた皆様方に深く感謝申し上げる次第です。

（家政学部教授）

受講者の声

自分が在学している大学の歴史、創立者大江スミ先生のことを知ることができ有意義だった。

学院に対して誇りをもった。

この大学に対しての印象が大きく変わった。

大江スミ先生の人柄や人生観を知り、女性としても大きな魅力を感じた。

大江先生の努力、熱意を知り、自分自身も何かに夢中になるものが欲しいと熱い思いが伝わった。

学長直々の講義を受けることができ感動した。

大江文庫という言葉を耳にしていたが、内容を知り興味をもった。

古い資料がこんなに沢山集められ大切に保管されていることを知りすごいと感じた。

古い資料を実際に見て、手に触れることができうれしかった。

受講しなければ知らないで卒業してしまったかもしれない…

受講して本当に良かった。

「受講者の声」はレポートを基に編集掲載しました。

（図書館　関原）

大江文庫授業風景

大江文庫公開事業：展示学習

新しい知との出会いをめざして

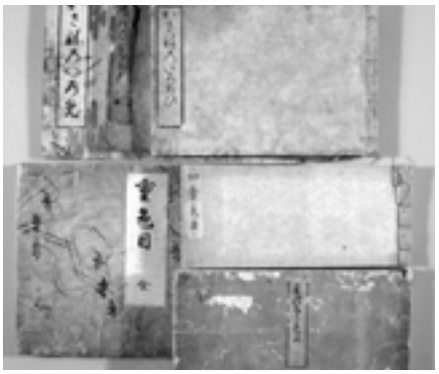
井上　眞弓

他者に伝えたい何かがあること、そして、自らの力で情報を発信していく力を持つこと。この二つの力の重要性を感じるなかから、卒業研究演習の一環として展示学習と展示を用いた授業を行って三年がたった。図書館職員のご協力のもと、大江文庫公開事業として行った古代文学ゼミの展示学習について、概略を紹介したい。

「新しい知との出会いをめざして」というテーマは、三年間変わらずに掲げているものである。大学図書館は、来館者の知的好奇心や知的欲求を満たすことが大事なミッションであるが、収集・集積した知的財産を開示して、利用促進を図ることも必要である。そもそも図書館は、「新しい知との出会い」の場ではないだろうか。展示学習は、本学が所蔵する大江文庫の資料を公開し、活用を促すことで図書館利用の拡大を図る目的に合致していると思われる。

展示一年目は「紫式部の歌を探そう」というテーマで、『源氏物語』の作者として知られる紫式部の詠んだ歌を集めてみた。その結果、各種和歌集所収の歌だけではなく、江戸時代の女訓物に見える紫式部詠や英語・韓国語に翻訳された歌を集めることが出来た。大江文庫には女子教育コレクションもあり、収蔵品の中から異種百人一首の数々を展示品に選んだ。

二年目はメインテーマを「文化の表と裏」とし、本学の生活文化博物館と同時開催とした。図書館と博物館とを回遊することで「新しい知との出会い」の場をさらに拡げる企図を持っての開催であった。学生展示は、図書館にて「源氏文化追跡」展と題して、「目に見えないもの」をどう物語は表現しているかという観点から、『源氏物語』や『狭衣物語』の物の怪、謡曲「葵上」、『雨月物語』「浅茅が宿」の幽霊、村上春樹『海辺のカフカ』の源氏引用等を取り上げ、大江文庫蔵の源氏注釈書や江戸期刊行の『狭衣』等を展示した。



大江文庫資料

博物館では「付録の文化史」という視点で、錦絵をはじめ、江戸時代の女性の書家であり、女訓物の執筆者でもある居初津奈の書物を中心に、女性用の辞書と男性が使った辞書等を展示品として選んだ。江戸時代の庶民が楽しく学ぶための「おまけ」＝「付録」に着目すると展示しきれない程数々の資料が大江文庫にあることがわかった。

三年目にあたる二〇〇八年は源氏千年紀にあたり、図書館にて「『源氏物語』の色」展を開催した。故実叢書所収の有職故実書である『満佐須計装束抄』の記事をもとに、学生が色紙を用いて手作りした「襲色目」の展示をはじめ、各種の大江文庫蔵『かさねの色目』『源氏男女装束抄』等を展示した。平安時代の流行色（今様色）を調べたところ、今年の流行色である「ショッキングピンク」に重なる事から、これらも展示に取り入れてみた。今回は嬉しいことに、非常勤講師の料紙研究家平澤和泉先生が、ご制作された「復元源氏物語絵巻」をお貸しくださった。絵巻に描かれた「二藍」を着装した男君や女房装束に見える有職模様などを間近に見ることが出来る貴重な機会となった。

さて、学生たちは、展示学習から何を学んでいるのだろうか。

普段和紙でできた書物を扱うということがほとんどないことから、学生たちは持ってみてあまりの軽さにまず驚き、合本などは表紙に目次が載っているという、いつも目にしている書籍との違いにまた驚くという状態であった。そうであるからこそだろうが、江戸時代の人がそれで勉強したという想像をも喚起させ、大いに楽しんで展示を行っていたようである。

展示を行うには、展示内容全般の調査・研究、テーマの設定、展示物の選定、キャプションの作成、展示品配置の概略図作り等が必要となる。その後漸く実際の展示に至るのだが、もっと見やすくするためにはどうしたらいいかなどを議論し、さらによい展示へと工夫を重ねる姿勢が見られた。さらに観者からのフィードバックを求め、パンフレット・ワークシート作り、アンケートの実施・分析等も行ったのである。

授業風景

大江文庫蔵の資料は、一人一人の学生が本物と向き合って学ぶことができる機会を与える教材となる。こうした環境をより整備し、さらなる有効利用を促進していきたい。併せて展示学習へのご理解を賜れば幸いである。

（人文学部教授）

本の周辺

お母さんに伝えたい 子どもの病気ホームケアガイド

茂木　富美子

今から４半世紀近くも前のことになりましょうか、第一線で小児の外来診療を行っている医師達が、実際の診療現場での問題点を拾い上げて討議を重ねてよりよい外来診療をめざす目的で立ち上げたのが「日本外来小児科学会」です。私も、それまでの大学での実験研究漬けの毎日から一般臨床病院に移り、すっかりと小児科臨床医になりましたので入会しました。

学術総会では、あらかじめいくつかのテーマが提示されていて会員はその中のいずれかを選んでグループ討論に参加します。日夜、小児科外来診療に明け暮れている医師達ですから、討議にも熱が入り他の学会参加では味わえない充実感を経験しました。

そんな中から生まれたのがこの本です。この本の特徴は、日常の小児科臨床経験の積み上げのある医師達が十分にディスカッションを重ねて書き上げておりますので、記述に「嘘がない」、「誤りがない」、「読みやすい」の３拍子がそろってます。

とかく個人の書いた育児書では総論部分の「育児哲学」には力が入っているが肝心の各論部分は手抜きというものも見かけます。その点、この本は育児のマニュアル本に徹していて、実用本として完成度が高いです。

実際、私の知り合いの医師で小児科以外の人が開業をするときにこの本をプレゼントするとよろこばれます。眼科とか内科で開業しても、やがて患者さんと親しくなると子供さんや孫さんのことを相談されることがあるとのことで、そういった折に「この本は大層役立つ」とのこと。

小児にポピュラーな病気について、病気別にイラストもいれてわかりやすい言葉で解説している、そして、それぞれの病気について、必要に応じて「治療」、「家庭で気をつけること」、「保育所、学校」などが枠付きで簡潔に書かれています。

診察室では、熱の高い子どもがぐずってしまい医師の説明を集中して聞けなかった場合でも、家に帰ってこの本を見れば、お母さんの心配を全部カバーした記述に不安が解けることでしょう。

ということで、お友達や身近な人が近々お母さんになるという時には、ぜひこの本をプレゼントしてください。喜ばれること間違いなしです。

（短期大学生活科学科教授）

※日本外来小児科学会編著　医歯薬出版

今も昔も ―節句―

ひな祭りや端午の節句・七夕、今も祝われる節句だが、江戸時代では五節句といわれ、幕府の公式行事であった。

○人日（じんじつ）の節句（一月七日）
七種粥を食べ、邪気をはらい、一年の無病息災を願った。

○上巳（じょうし）の節句（三月三日）
昔は人形にけがれを移して、川に流したりしていたが、江戸時代には雛人形を飾り、女児が健やかに育つことを願う行事になった。

○端午の節句（五月五日）
薬草を摘んだり、菖蒲（しょうぶ）酒を飲んだりしていたが、「菖蒲」が「尚武」に通じると言うことで、男子の立身出世を祈り、鯉のぼりや武者人形を飾るようになった。

○七夕の節句（七月七日）
もとは中国に由来し、牽牛星と織女星の星祭の伝説と乞巧奠（きこうでん）という女子が手芸の上達を願う行事からきたといわれている。

○重陽（ちょうよう）の節句（九月九日）
中国の思想で九はめでたい数字で、それが重なる九月九日を大変めでたい日としていた。邪気を払い、長寿を祈り、菊を飾ったり菊酒を飲んだりした。

大江文庫には年中行事に関した資料を所蔵しているが、今回は錦絵から「豊歳（ほうねん）五節句ノ遊」という五枚揃いのうち三枚を次に紹介する。

崩し字を読むことは難しいが、絵からその風俗を読み取ることもできるので、是非活用してほしい。

豊歳五節句ノ遊　人日
女性の手には羽子板が、子供の足元には凧がみられる。

豊歳五節句ノ遊　上巳
左上には桃の花があり、雛人形を飾っている姿がみられる。

豊歳五節句ノ遊　端午
手には金太郎の人形、足元には鯉のぼりがみられる。

る。原さんは、晶子は「真っ直ぐな感情をそのまま表し」「情熱的であり」「鉄幹のことをどれほど好きだったのか、よくわかります。ただ、周りが見えていないような印象はあります」とする。登美子は「必死に愛する人を忘れようと努力する、つらさがこちらにも伝わってくる」「あまり、感情を表に出さず、控えめな、一人の女性の身を引く恋のつらさ・悲しさを表現」したと、明解である。原さんと同じ立場の武田住寿実さんは「登美子は、抑制のきいた歌に託し、哀れで美しくしとやかな恋を貫いたのではないだろうか。これらの点から私は(中略)一歩引いたところから物事を見ることのできる、登美子のようなしとやかで聡明な女性の作った歌に賛成する」とゆかしくまとめる。

晶子を支持する川上冴さんの後半は、次のとおり。「唯美的な、情緒の溢れる世界観を成立させている。全体的に流麗にまとめながら、情熱的で、その上セクシャルな香りさえ漂わすのだから、一世紀を経た現代でも、その歌の調べは新鮮に聞こえる。そして、作者の真の心を真の声に出しているからか、人を愛することにおいて極めて情熱的な彼女らしさが、考えることを超えて直に胸に響き、作者と歌と自分とを近くに感じられる」と、川上さんも、はつらつと、いきおいがある。

私は理解活動と表現活動、個人学習と集団学習を、教育の場において実践することを心がけ、相互の活動の交流を循環教育と名づけている。そこからは、学生たちの心の声の響きあいが聞こえ、私をなごませてくれるのである。

（人文学部教授）

本学教員寄贈著書紹介

平成20年に寄贈を受けた本学教員の著書等を紹介します。ご寄贈いただきましてありがとうございました。今後も著作物出版の折にはご寄贈いただければ幸いです。

上村協子（家政学部）
- 妻と夫の財産　東京女性財団 1997
- 財産・共同性・ジェンダー　東京女性財団 1998
- 現代社会の生活経営　光生館 2001
- 多様化するライフスタイルと家計　建帛社 2002
- 少子高齢社会と生活経済　建帛社 2004
- 家政学の社会貢献-総合家政と国際協力　東京家政学院大学 2005
- 総合家政の知を生かした教育方法の開発　2004年度　東京家政学院大学 2005
- 総合家政の知を生かした教育方法の開発　2005年度　東京家政学院大学 2006
- 若手研究者が読む『家政学原論』2006　家政教育社 2006
- 家政学概論(介護福祉士養成講座)　中央法規　2006
- 規制改革と家庭経済の再構築　建帛社 2007

江原絢子（家政学部）
- 近代料理書の世界　ドメス出版 2008
- 日本食生活史　吉川弘文館 2007

酒井治子（家政学部）
- 保育所食育実践集Ⅲ　日本保育協会 2008
- 保育所における食育の計画づくりガイド　財団法人児童育成協会児童給食事業部 2008

佐久間昭子（家政学部）
- インターンシップ成果報告書平成19年度　東京家政学院大学 2008

須永和宏（人文学部）
- ニューメディア時代の子どもと文化　東山書房 1988
- 不登校児が問いかけるもの　慶應通信 1993

西海賢二（人文学部）
- 武州御岳山信仰　岩田書院 2008
- 富士・大山信仰　岩田書院 2008
- 「講」ってなあに？　練馬区教育委員会 2008
- 念仏行者と地域社会　大河書房 2008
- 旅 江戸の旅から鉄道旅行へ　国立歴史民俗博物館 2008
- コロスほか　論文多数

原口秀昭（家政学部）
- 路易斯·I·康的空间构成　中国建筑工业出版社 2007
- ゼロからはじめるRC造建築入門　彰国社 2008
- マンガでわかる環境工学　彰国社 2008
- 제로에서 시작하는 공학을 위한「수학·물리」교실　기문당 2008

藤掛洋子（家政学部）
- ジェンダーで読む健康/セクシュアリティ　明石書店 2003
- ジェンダー視点に立ったPCM研修　東京家政学院大学 2008
- 評価論を学ぶ人のために　世界思想社 2008

文学教育の現場から

大久保　晴雄

基礎科目の、文化と表現領域の「日本の文学」(講義2単位)を、私は担当している。全体の主題を『いのちを慈しむ文学』として構成し、感動の主体ごとに、家族の愛等の小主題を設定している。文学史の流れも視野に入れつつ授業(講義)を展開し、小主題に応じて表現活動を取り入れてきた。鑑賞などの表現活動は学生たちの授業理解の確認ができ、私にとっては反省とともに次の授業組立ての参考になる。言葉として定着した学生たちの作品への感動を追体験することは、文学の教育をするものにとって、たのしみの時なのである。

全体主題『いのちを慈しむ文学』を、私は5つの小主題に分けて単元構成をしてきた。各年度ごとで学生の実態は変化し続けるので、当初の計画どおりには進展しない。しかし、ここ5年、いや、それよりずっと以前から確実に支持を得ている小主題は、「恋」である。恋は、永遠の謎ゆえの、学生たちの興味関心の高さなのであろうか。

明治という近代、詩歌においても浪漫主義文学運動が起こった。与謝野鉄幹(寛)は1899年(明治32)に「新詩社」を結成して、翌年には同人誌『明星』を刊行した。『明星』の浪漫的な作品と運動は、明治30年代の詩歌壇の中心となったと言ってもよい。『明星』の若手の女流として、期待と注目を集めた二人が、鳳晶(ほうしょう)(与謝野晶子)と山川とみ(山川登美子)であった。二人ともに、鉄幹を師と仰ぐとともに、異性として慕った。鉄幹来阪の折、1900年(明治33)8月に三人で会ったことで、運命は大きく動きはじめる。

私の手製のテキストを、学生たちに配布する。晶子と登美子の短歌作品を5首ずつ掲載し、二人の略歴・主要作品の解説が付してある。近代以降の短歌作品鑑賞の場の授業では、私は通釈を極力しない。語義を示すに、可能な限りとどめる。個々の感性と言葉の力を大切にして、学生たちの味読の力をつけたいからである。知識的必要事項は、図書館活用をすすめている。

表現活動の課題は「与謝野晶子・山川登美子の課題の歌2首をそれぞれ読み、2人の表現から事実関係を踏まえ、どちらに共感を持ったか、立場を明らかにして、200字(標準)程度で述べよ」という趣旨。自宅学習とし、次時に提出とした課題の歌は、次のとおりである。

与謝野晶子の歌『みだれ髪』

『みだれ髪』表紙

臙脂色(えんじいろ)は誰にかたらむ血のゆらぎ
春のおもひのさかりの命

やは肌のあつき血汐にふれも見で
さびしからずや道を説く君

山川登美子の歌『恋衣』

髪ながき少女とうまれしろ百合に
額(ぬか)は伏せつつ君をこそ思へ

それとなく紅き花みな友にゆづり
そむきて泣きて忘れ草つむ

『恋衣』表紙

提出された学生たちの文章は、力編ぞろいであった。数字的には提出者80名中、登美子支持60%、晶子支持40%という結果だった。この調査的課題を始めた15年前の頃は、晶子支持が70%を占める。4年前から昨年度までは、ほぼ互角。時代状況の一面とも言えよう。

晶子と登美子の歌の分析の大方の傾向は、登美子支持の原摩耶さんの文章に適切に書かれているので、引用す

資料の紹介

『design of life 生活のデザイン』の考え方

L.moholy-nagy 著
・バウハウス叢書14「材料から建築へ（von material zu architektur：1928）」
（訳：宮島久雄　中央公論美術出版：1992）
・「vision in motion」paul theobald publisher：1961

岩井　一幸

「デザイン」とは何か。文科省は昨年12月高校学習指導要領改訂案を発表した。この案には「〇〇デザイン」と呼ばれる教科目が多数見られる。「共通する各教科の科目」の「家庭」では「生活技術」を改編、「生活デザイン」とし、「芸術」のなかの「美術」ではビジュアルデザインを扱い、「工芸」は内容を「身近な生活と工芸」「社会と工芸」に再編している。「専門教科の科目」の「家庭科」では「被服制作」を「ファッション造形基礎」「ファッション造形」に構成、「リビングデザイン」「服飾手芸」「ファッションデザイン」「フードデザイン」と並べた。「工業科」では「機械設計」「建築計画」「設備計画」「染織デザイン」「インテリア計画」「インテリア装備」「デザイン技術」「デザイン材料」「デザイン史」、「商業科」では、「文書デザイン」を商取引や広告・広報を学ぶ「電子商取引」に変更した。「情報科」では「コンピュータデザイン」を「情報デザイン」とし、「美術科」では、「情報メディア表現」を「情報メディアデザイン」と「映像表現」に分け、「ビジュアルデザイン」「クラフトデザイン」「環境造形」と合わせ、構成している。高校生にとって、「デザイン」とは何か。「デザイン」の語が乱用され、デザイン、計画、設計に関する科目を個別に解釈し、「デザイン」の意味の相互関係、デザインの体系は見えてこない。

「デザインは生活が行われている世界がどうあるべきかを形を通して提案し、生活世界の全体性総合性を形成する」とする理念（design of life）を造形教育に始めて示したのは、1919年ワイマールに創立され、建築及び舞台を総合教育の中心としたbauhausという造形学校である。向井周太郎氏も言うように美術学校でも工芸学校でもなく、「gestaltung」、すなわち「造形」あるいは「形成」、今日の「design」の学校であった。

家政学とデザイン学と文化人類学とは似ていると述べたのは、文化人類学者の大給近達氏である。生活世界を対象とするそれらに共通するのは、①対象は総合性をもって捉えなければ理解できないものであり、②総合性は分析的な知識では教育できず、体験や実験が重要となり、③体験や実験することによって得られる創造的な部分があるという。生活をばらして分析的に理解しようとすると生活はわからなくなるように、デザインは生活世界の全体性を常に対象とし、ばらして理解しようとするとデザインが見えなくなる。

この生活世界の全体性総合性を理念としたバウハウスで注目されたのが、それを具現化した基礎教育であった。その実践の記録が「材料から建築へ」と後年それを展開した「vision in motion」である。「vision in motion」は、序・Ⅰ：状況の分析―vision in motion ・Ⅱ：新しいアプローチの方法―design for life・Ⅲ：新しい教育―organic approach a）一般概論 b）総合ー芸術・Ⅳ：提案から成る。

デッサンや模写を基本とする伝統的なアカデミーの美術教育に対して、バウハウスの基礎教育の創始者ヨハネス・イッテンは、スイスの師範学校においてフレーベルの影響を受け、芸術は教育出来るとして、エレメントにわけ、造形を教えるように組立てたコンセプトを完成している。モホリ・ナギはこれをさらに材料から建築までのデザイン言語へと発展させ、アメリカンバウハウスにおいて、その理論を「vision in motion」に述べ、造形教育としてのbasic designから、技術や材料、情報技術の発展による教育訓練がもつ創造の観点に着目したdesign fundamentalsに展開する基礎を作っている。

今日までデザイン学校は、生産者側の条件を重要視してきた。しかしデザインされたものが, 生活世界に溢れ、日本では誰でもデザインができる成熟したデザイン化社会が成立し、従来からの産業偏重のデザインを生活者目線で再構成すること、生活者によるdesign of lifeの理念の確立が可能となってきた。

「声をだして読みたい日本語」の著者、斉藤孝氏は、文学部にもデザイン学科が必要になったとし、空間デザインは空間の中で人がどう座り、歩き、食事し、生活するかまでデザインする。ならば人間を深く多面的に研究している文学部ならではデザイン提案があると考え、デザインされた物の中で、人間のあり方を考察する視点を持つ必要がある時代になってきていると述べている。

生活者側から見た「design of life 生活のデザイン」として生活世界に対するデザイン構想が求められている。身の回りの「生活のデザイン」として矮小化すべきではない。50年近く前の学生時代に読んだこの２冊は以来教育に研究に「design of life」の意味を深く考えさせられてきた本であった。　（人文学部教授）